# 大肥中村遺跡

## ―発掘調査概報―

2003年 日田市教育委員会

# 例　　言

1．本書は平成10年度に大分県日田地方振興局より大明地区担い手育成基盤整備事業に伴い発掘調査委託を受けて行いました「大肥条里中村地区」の発掘調査の概要報告です。

2．大明地区一帯はこれまで古代の条里跡として周知されてきたため、これまで遺跡名を「大肥条里中村地区」として「年報」等に掲載しましたが、発掘調査等の結果から条里跡は存在しないことが明らかとなり、遺跡の名称としては不適切なため、本書より「大肥中村遺跡」と改めます。なお、他の大肥条里地区の遺跡名は、契約上の名称でもあるため、今回は変更せずにこれまでの遺跡名として掲載しています。

3．本書に掲載した遺構・遺物写真は、担当者のほか文化財写真家長谷川正美氏の委託によるものを使用し、空中写真ついては、有限会社スカイサーベイによるものを使用しています。また表紙及び裏表紙の写真は、「大肥郷ふるさと農業振興会」が平成12年度及び14年度に行いました「大肥郷稲刈り体験」・「大肥郷麦踏み大会」の写真を使用しています。

4．本書に使用した遺構配置図は、「平成10年度日田市埋蔵文化財発掘調査年報　大肥条里中村地区」に使用したものを一部改変して使用しました。また、図版に使用した地形図のトレースは、日田市教育委員会文化課調査補助員藤野美音氏の製図を使用しています。

5．本書に使用の実測図の方位は真北を指します。

6．本書の執筆・編集は、土居の協力を得て行時が行いました。

大肥中村遺跡周辺の空中写真

# 目　　次


Ⅰ．調査の経緯と周辺の環境 …… 1

1．調査に至る経過と組織 …… 1

2．遺跡の立地と環境 …… 2

Ⅱ．調査の内容 …… 4

1．発掘調査の経過 …… 4

2．A区の調査 …… 5

3．B区の調査 …… 7

4．C区の調査 …… 10

1）第1面の調査 …… 10

2）第2面の調査 …… 12

3）第3面の調査 …… 15

Ⅲ．まとめ …… 17

Ⅳ．おわりに …… 17

# Ⅰ．調査の経緯と周辺の環境

## １．調査に至る経過と組織

大明地区担い手育成事業は、大分県が主体となって大明地区4集落の水田26haを対象に基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設なども含めたモデル営農団地を創設することを目的として平成９年度から事業が着手されました。このうち大肥中村遺跡は２工区にあたります。平成９年11月10日から12月26日まで、この工区内の水田の下に遺跡が存在しているかどうかを判断するために、機械(バックホウ)によって試掘調査を行ったところ、工区内の広い範囲から、古い時代の建物の柱穴の跡などの遺構とともに土器や陶磁器などの遺物が発見されました。この結果を大分県日田地方振興局耕地課に報告し、この遺跡についてどのように取り扱うかの協議を行いました。協議の結果、遺構の確認された範囲の中で、農道工事区間については半永久的な構造物であること、水路工事区間は地下深く掘削すること、また基盤整備予定区域でも土の切り盛りの関係で大きく掘削される場所では遺跡が工事で失われてしまう危険性があることなどから、これらについては発掘調査を行い写真や実測による記録を撮って後世に残すことになりました。

なお、調査の組織については以下のとおりです。

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　日田市教育長　加藤正俊　後藤元晴

調査指導者　村上恭通(愛媛大学)　大澤正己(北九州テクノリサーチ)　坂本嘉弘(県文化課)　宮内克己　山田拓伸(大分県立歴史博物館)

調 査 事 務　日田市教育委員会文化課　原田俊隆　後藤清　長尾幸夫　石井英信　田中伸幸　佐々木豊文　島崎誠司　園田恭一郎　酒井恵　美野寿美香　江田香織

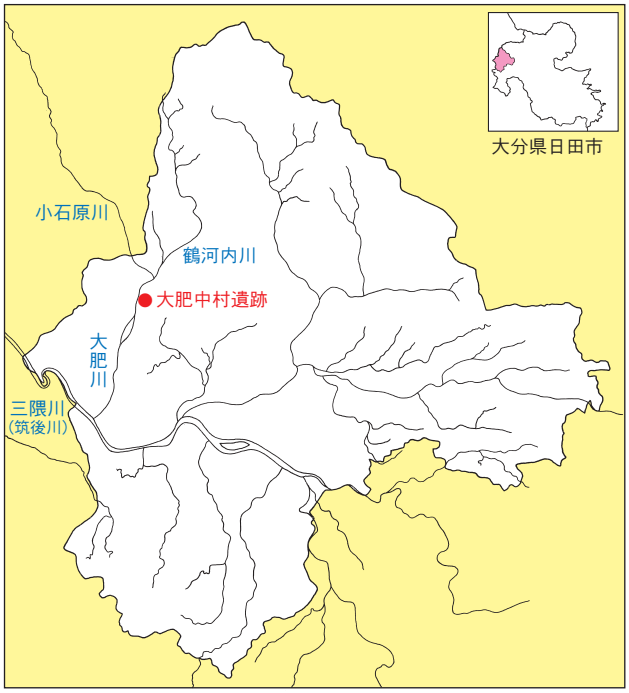
調　査　員　土居和章(試掘調査担当)　行時志郎(発掘調査担当)　吉田博嗣(発掘調査担当)　行時桂子　若杉竜太　渡邉隆行

調査作業員　安達義男　猪熊誠　猪熊忠孝　手嶋トシエ　高村笑美子　秋吉タミエ　猪熊ヨネ　杉森久恵　渡邉芳五郎　岡部進　園田義雄　穐本文雄　島田松之助　石松樹　清水忠造　平美典　秋吉ミユキ　河津志保　今井由美子　蒲池妙子　一ノ宮高喜　森山サチ子　藤田ミユキ　黒木改造　竹口友紀　岡部寿美恵　石井チエ子　後藤英子　高倉松雄　高倉知子　井上次男　森山清子　西山和美　大内千恵子　森山ミツ子　菅真由美　森山春義　財津真弓　小下一　津江久徳　財津由太　石井貞美　森山熊夫　原田ヤス　伊藤智恵子　梅崎和子　和田常次郎　和田文子　一ノ宮嘉蔵　田中伝江　梶原秋夫　野村勉　梶原サツ子　野村義子　梶原キヨミ　高野瞳　安心院司　小野忠臣　高倉厚己　一ノ宮ヒサ子　森山敬一郎　一ノ宮森男　平川吉春　吉田勝秋　森山ミチ子　森山八重子　五反田静子　財津利枝　森山国雄　吉弘昇　高倉美利　高倉富美子　（敬称略・順不同）

発掘調査風景

## ２．遺跡の立地と環境

大肥中村遺跡は、大肥川沿いに形成された沖積地の左岸河岸段丘上にあり、大字大肥字中村一帯に存在する遺跡を指しています。この大肥川は、福岡県朝倉郡小石原村に源を持つ小石原川と日田市の最高峰岳滅鬼山麓に源を持つ鶴河内川とが合流してその名　称となり、南走して三隈川(筑後川)に合流します。小石原川や鶴河内川流域の谷は勾配が急であるため、雨量の多い時などには侵食によって大量の土砂を下流域に運搬し、結果として勾配の緩やかとなる大肥川流域には、その堆積作用により現在見られるような比較的平坦な沖積地が形成されたと考えられます。

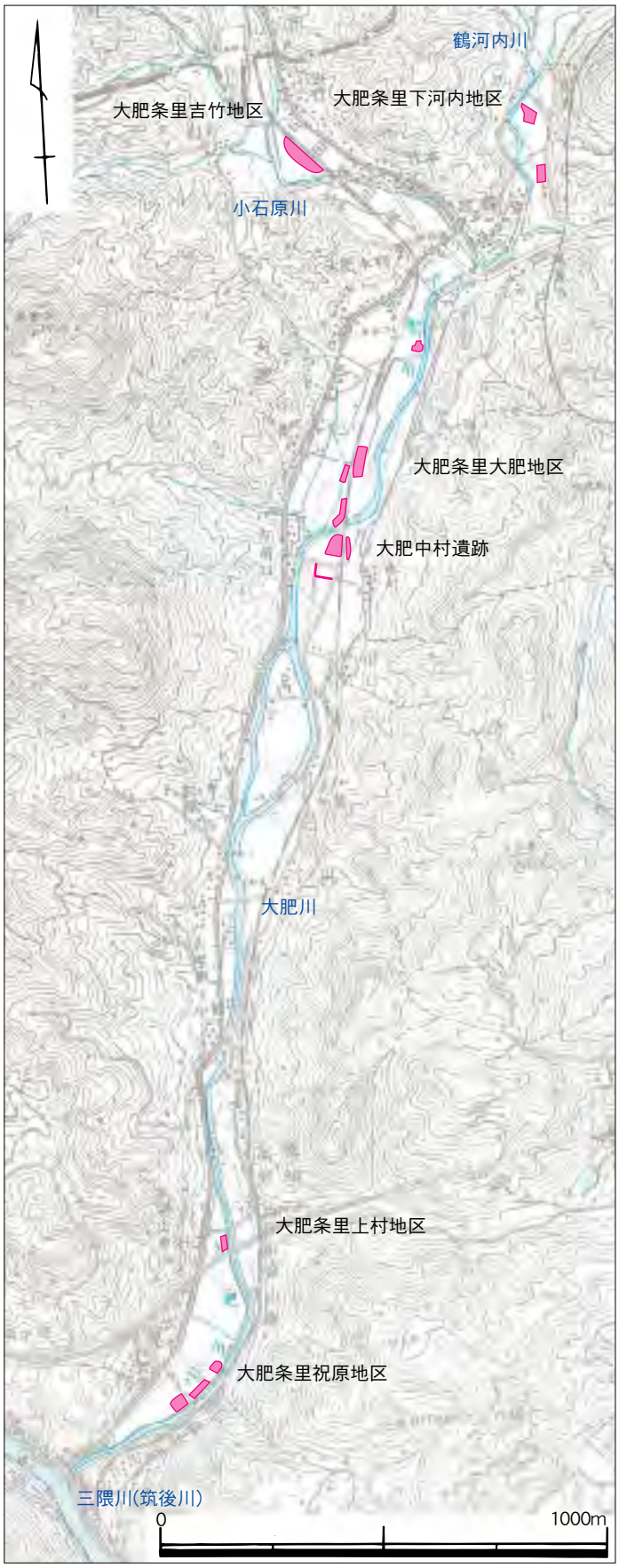



遺 跡 位 置 図

この事業が開始される前の沖積地一帯の地勢を見ると、山際に集落が点在する以外の大部分は水田の作付けが行われていました。これらの水田は地図上でみると１枚１枚が畦畔によって碁盤目状に区画がされているように見えることから、古代の土地区画制度である条里制の跡として考えられてきましたが、ここ数年の試掘や発掘調査の結果からは、古代の条里に関係するような遺構は発見されなかったので、条里跡そのものは存在しなかったことが判りました。また、これらの水田の下からは、大肥中村遺跡以外にも発掘調査によって、縄文時代から近世までの各時代の様々な遺構が発見されています。

まず、鶴河内川左岸の河岸段丘上にある**大肥条里下河内地区**では、今から約6,000年前の縄文時代前期の調理場の跡と考えられる集石遺構などが発見されました。大肥川下流の右岸河岸段丘上にある**大肥条里祝原地区**では、今から約4,000年前の縄文時代後期の集石遺構などが発見されるとともに、当時使われていた夥しい数の土器や石器も一緒に見つかりました。また、今から約2,000年前の弥生時代中期の竪穴住居跡なども発見されました。この祝原地区から約1km上流にある**大肥条里上村地区**では、今から約1,800年前の弥生時代後期と考えられる竪穴遺構や甕棺墓なども発見されました。さらに、大肥中村遺跡と大肥川を挟んで向かいにある**大肥条里大肥地区**では、弥生時代中期から後期にかけての多数の竪穴住居跡からなる集落遺構や弥生時代中期の甕棺墓・石棺墓をはじめとする墓地群が発見されるとともに、この西側を当時流れていたと考えられる弥生時代の旧河道の中からは三叉鍬をはじめとする大量の木製品が発見されました。この他、小石原川左岸河岸段丘上に位置する**大肥条里吉竹地区**では、今から約1,400年から1,200年前の古墳時代後期から古代にかけての多数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの集落遺構が発見されました。

これらの遺跡は、いずれも大肥川や鶴河内川、小石原川のすぐ近くにあり、逆に川から離れた場所での遺跡の発見はほとんどないことから、人々の生活はこの川と密接に関係しながら営まれていた様子がうかがえます。




第１図　大肥地区の遺跡位置図（1/30,000）

大肥条里下河内地区３号集石遺構

大肥条里吉竹地区全景

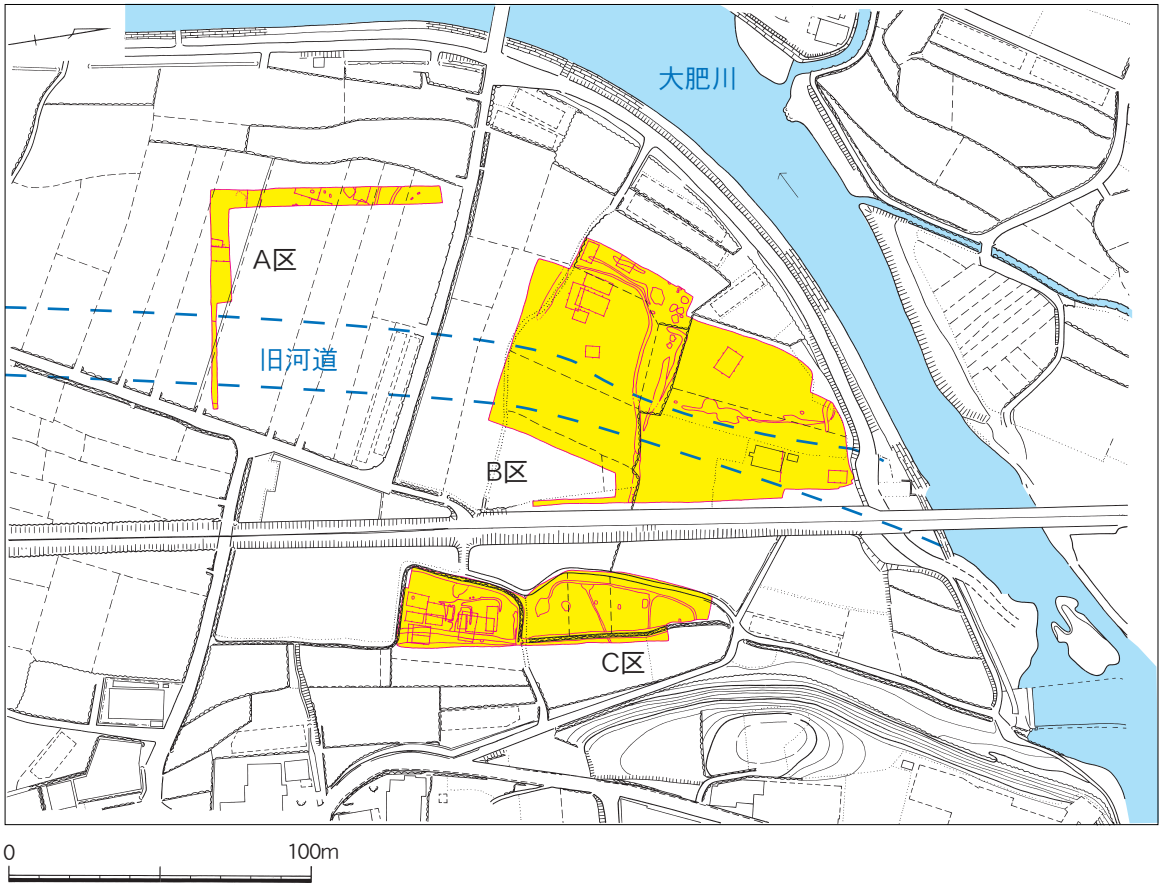
大肥条里大肥地区（Ｂ区）全景

大肥条里祝原地区（Ｄ区）全景

# Ⅱ．調査の内容

## １．発掘調査の経過

発掘調査は、農道及び水路工事予定区間で調査の対象となった地点をA区、工事でやむを得ず切土となり発掘調査の対象となった区域で、JR線を境に西側をＢ区、東側をＣ区として、３つの調査区に分けて行いました。Ａ区の調査は、平成10年７月７日から８月２日まで行い、引き続きＢ区の調査に移っていきました。Ｂ区は９月７日から調査を開始し、10月22日からはＢ区と併行しながらＣ区の調査を開始しました。Ｃ区では、試掘調査で水田盤土（ばんつち）のすぐ下から遺構が発見されており、この面（第１面）で機械による遺構の検出を開始しましたが、作業中にこの面の下の層位（そういい）から、この面の遺構よりも古い時代の遺構があることが判ったため、この第１面の調査を11月29日に終了した後、すぐに機械によりその下の遺構（第２面）を検出するための作業を開始しました。ところがその後の調査の過程の中で、調査区南側一帯から石棺（せっかん）墓等の遺構が検出されたことから、この下にもう１枚、さらに古い時代の遺構面があると考えられたため、第２面の調査が終了した場所から順に、その下の遺構面（第３面）までの掘り下げ作業を進めることとなりました。こうした経過と工事も急ぐ中で発掘調査は困難を極めましたが、地元の発掘調査作業員の方々のご協力をいただきながら、年も押し迫った12月30日にようやく大肥中村遺跡のすべての発掘調査を終了することができました。




第２図　大肥中村遺跡調査区位置図（1/2,500）

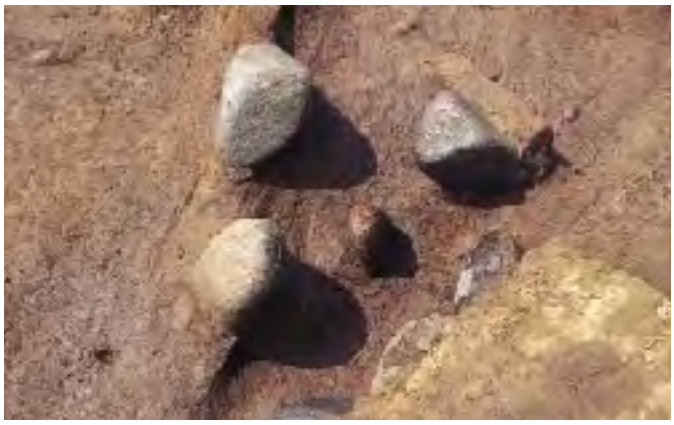
## 2. Ａ区の調査

Ａ区では、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡６棟、溝２条、石棺墓１基、土坑（用途不明の人工的に掘られた穴）７基などの遺構が発見されました。また、調査区東側では多数の河原石などを含んだ砂礫層が深く続く旧河道の跡も確認されました。

発見された遺構は、営まれた時代がそれぞれ異なっていたので、古い時代の遺構から順に説明を行います。この中で最も古い遺構は石棺墓です。石棺墓は弥生時代後期〈今から約1,900～1,700年前〉につくられたお墓の跡で１基だけが発見されました（Ⅰ期)。次に古い遺構は調査区の北側で発見された１・２号溝です。この溝は何に使われたのか用途はわかりませんが、溝の中から出土した土器の形から古墳時代中期〈今から約1,600～1,500年前〉に掘られた溝と考えられます（Ⅱ期)。次に古い遺構は、この溝のすぐ南側で発見された１・２号竪穴住居跡です。これらの竪穴住居跡は古墳時代後期〈今から約1,500～1,350年前〉につくられたこの時代の一般的な住居で、地面の下を掘りくぼめて住居としているためこのように呼ばれています。住居の側面中央には、食べ物の煮炊きに使われるカマドが取り付けられていました。またこの住居の中からは、土師器と呼ばれる縄文時代からの伝統的な素焼きの土器とともに須恵器と呼ばれる登り窯で焼かれた灰色をした土器も多数出土しました（Ⅲ期)。次に古い遺構は、この住居跡の南側で発見された３・４号竪穴住居跡です。これらの住居跡は今から約1,300年前の奈良時代〈今から約1,300～1,200年前〉の竪穴住居で、古墳時代に比べると住居の大きさが小さくなっています（Ⅳ期)。最も新しい時代の遺構は１～４号掘立柱建物跡です。これらの建物は、平安時代〈今から約1,100～900年前〉では一般的となる平地式の建物で、穴を掘って直接その穴の中に柱を立てた住居です（Ⅴ期)。また、調査区東側で見つかった旧河道の跡の上には重複して昔の水田の層が確認されましたが、このうち最も下の層からはこれらの掘立柱建物跡とほぼ同じ時代の遺物が見つかりました。この頃から大肥中村遺跡では本格的な水田開発が進められるようになったと考えられます。

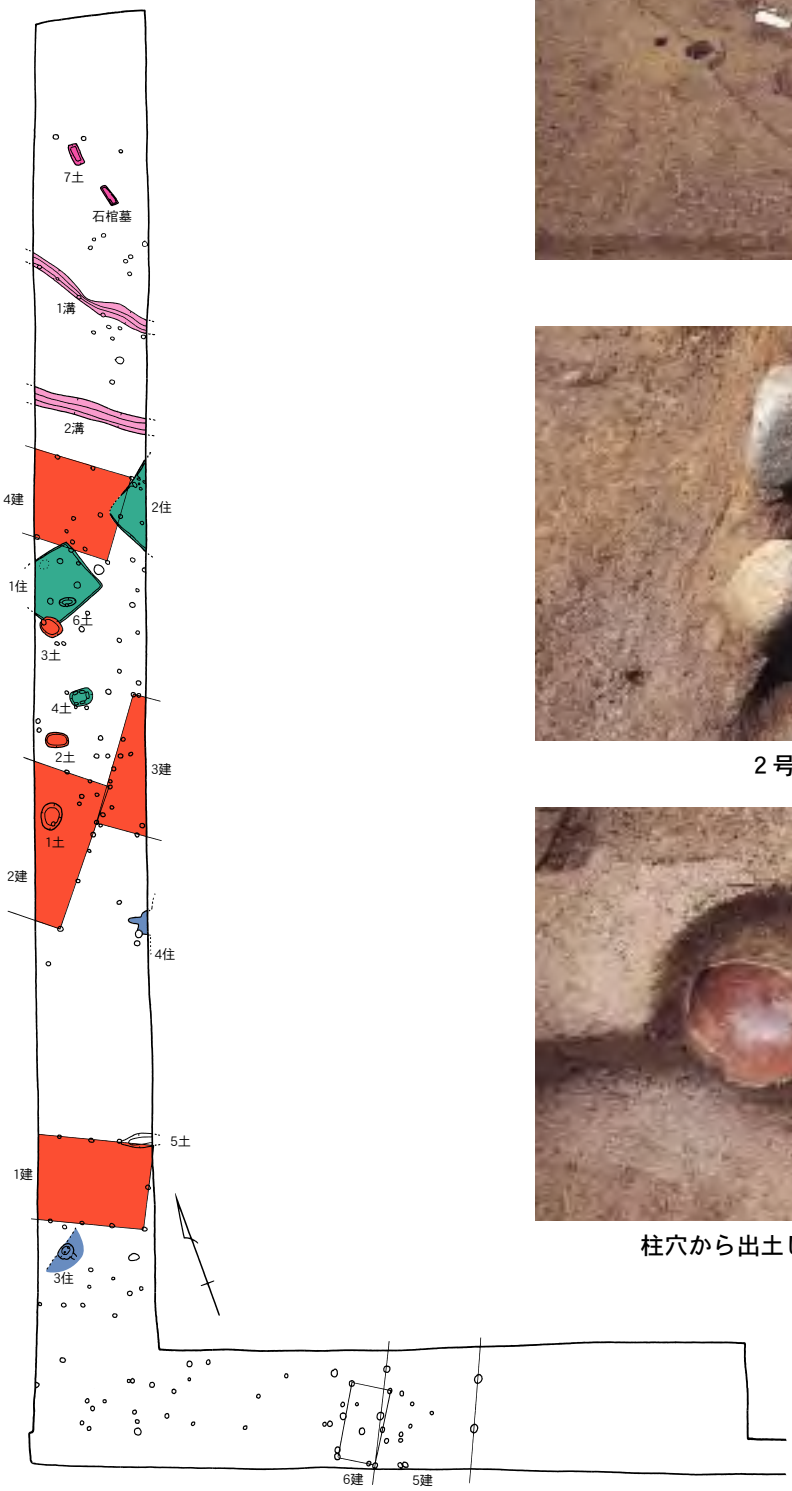
Ａ　区　全　景

1号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡カマド

柱穴から出土した土師器(左)と須恵器(右)




※ 住…竪穴住居跡
建…掘立柱建物跡
土…土抗

Ⅰ期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
Ⅴ期

第3図　A区遺構配置図(1/400)

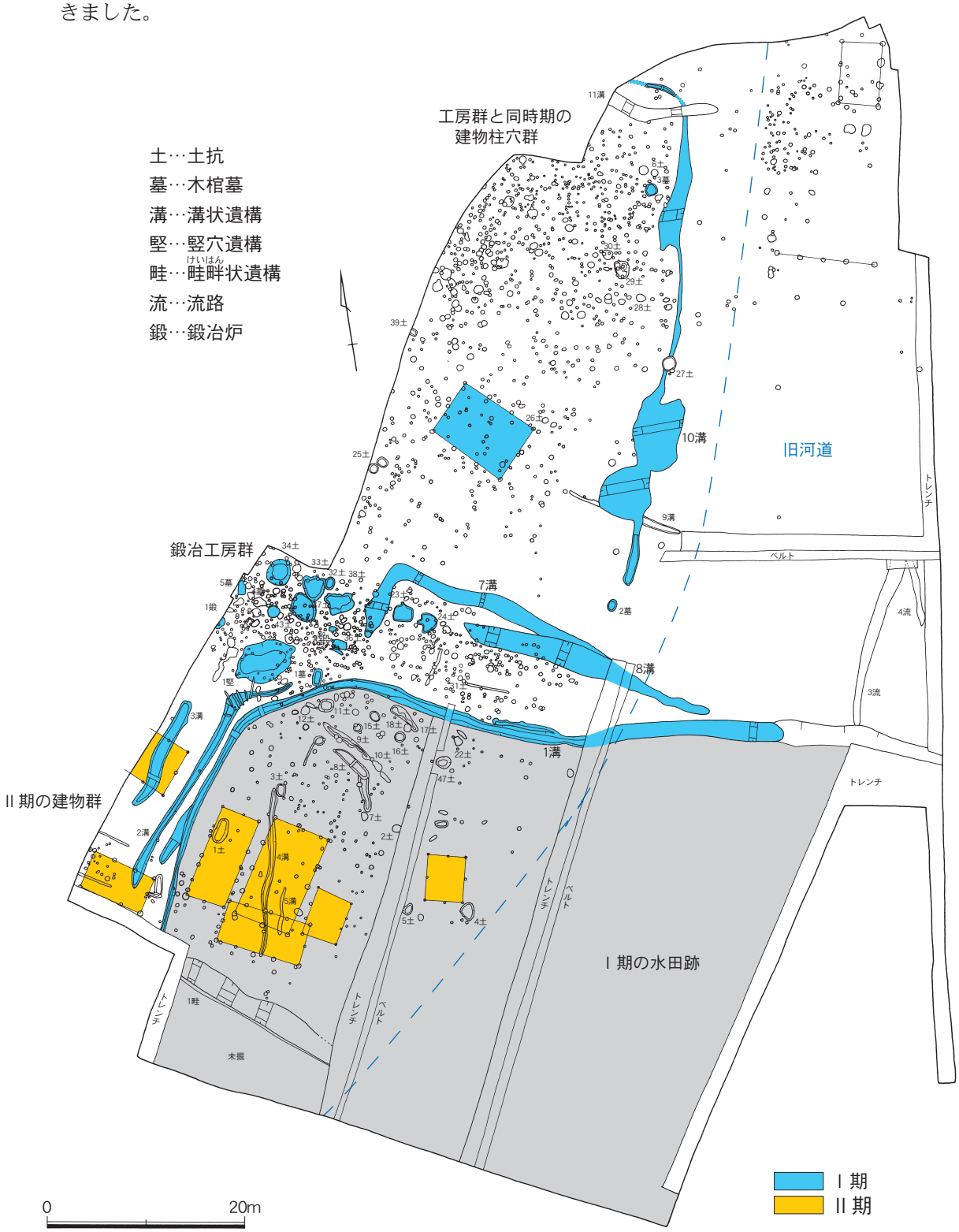
## ３．Ｂ区の調査

Ｂ区では、鎌倉時代から室町時代前期〈今から約800年～600年前〉にかけての遺構（Ⅰ期）と室町時代後期～安土桃山時代〈今から約500年～400年前〉にかけての遺構（Ⅱ期）が発見されました。このうち調査区南側の建物群を除くと、ほとんどがⅠ期にあたります。Ⅰ期では、掘立柱建物跡や溝跡、木の棺でつくられたお墓など当時の集落の跡がまとまって発見されました。

Ⅰ期の遺構を全体的に見ると、調査区中央を南北方向に延びる10号溝を境に西側と東側で全く遺構の数が異なっていることに気が付きます。10号溝の東側では、地山面に大きな河原石が見られる礫層が広がっていました。この礫層を南に辿ると、その延長上にはA区で確認された旧河道跡に繋がります。おそらく大肥川の氾濫をさけるために、かつて旧河道であった東側には住居を構えなかったものと推測されます。この10号溝は、溝の西側にある建物柱穴群を囲むように調査区の北端で西に向かって屈曲しています。この建物柱穴群は調査区の北側に密集していますが、南側にいくに従ってだんだんと数が少なくなっています。ところが調査区の中央付近では、東西方向に延びる７号・８号溝の南側で再び多くなり、これ以外にも土坑や墓などの遺構が密集してつくられていました。土坑群を見ると、一番東側の24号土坑から西側の34号土坑まで東西方向に規則性を持って並んでいるような様子が窺われます。また、これらの土坑群の間には、直径30～50㎝、深さ10㎝程度の鍛冶作業を行う時に鉄を赤く溶かすための炉跡が発見されました。これらの土坑や鍛冶炉跡の中からは、溶けた鉄のかすが炉の底で堆積してできる鉄滓や鉄を鍛打する時に火花のようになって飛び散る鍛造剥片と呼ばれる薄い鉄のかけら、そして鍛冶炉に空気を送り込んで温度を調整するための送風施設(吹子)の先端につけられていた羽口などが出土しました。このことから、７・８号溝付近の土坑や建物柱穴は、鉄器を生産するための様々な用途をもった工房群であったと考えられます。これらの遺構の南側では、調査区東部から南部に向かって屈曲する１号溝が発見されました。

Ｂ　区　全　景

る１号溝が発見されました。この１号溝から南側では、この面での遺構は確認されず、この時代の遺物を多く含む包含層が広がっていました。この包含層の下の状況は、平坦で硬くしまった盤土状をしていたので、当時の水田の跡であったと考えられます。このほか１号溝や10号溝の近くからは５基の木棺墓が発見されました。このようにＢ区では、調査区中央に鍛冶工房群、そしてその北側にはおそらくこの鍛冶作業に携っていた人々の住まいがあり、それらの周囲には点々と墓地がつくられ、さらにこうした集落の南側には豊かな水田が広がるという当時の景観を垣間見ることができました。




第４図　B区遺構配置図(1/600)

B 区 全 景

1号竪穴遺構

33号土坑

3号鍛冶炉跡

33号土坑内出土の鉄滓

3号鍛冶炉跡出土の鍛造剥片

1号木棺墓内副葬品出土の様子

## ４．C区の調査

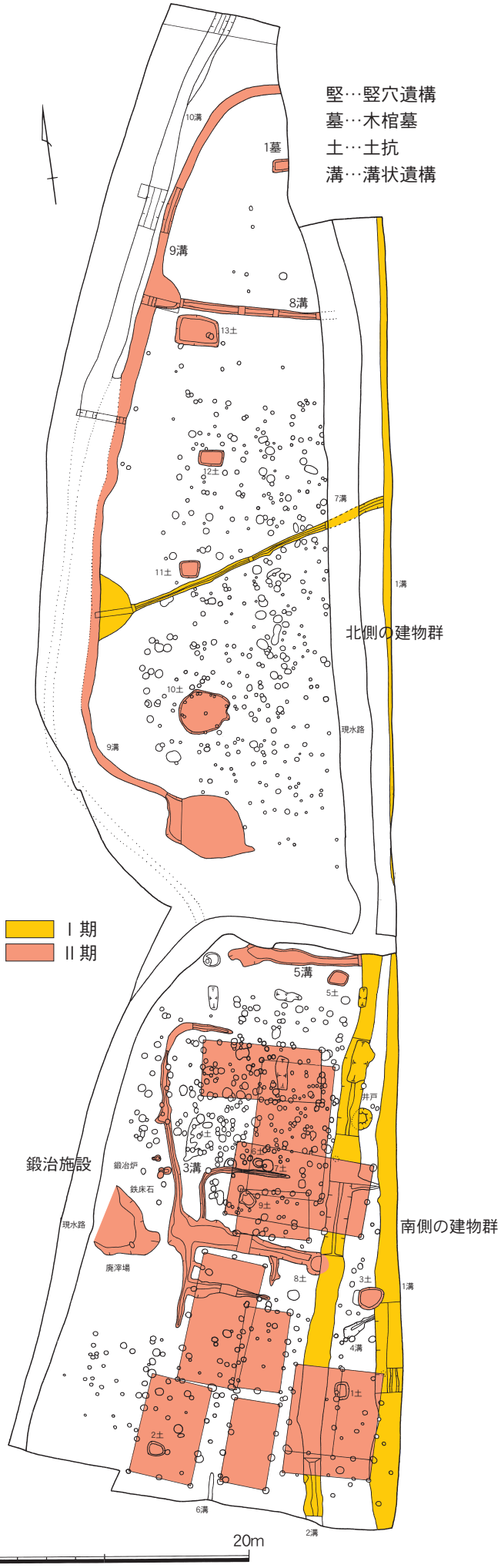
### １）第１面の調査

第1面では、室町時代後期〈今から約550～450年前〉の遺構（Ⅰ期）と、江戸時代前期〈今から約400～300年前〉の遺構（Ⅱ期）が発見されました。このうちⅠ期の遺構は、１・２・７号溝と井戸跡で、それ以外の大部分はⅡ期の遺構です。

Ⅰ期の遺構のうち２号溝は、南北方向に直線的に延びる溝で、北側は現在の水路と重複していました。溝の中からは、中国明（みん）時代の皿などが出土しました。井戸跡は河原石を使った井戸で、深さは２m以上ありました。後からわかったことですが、この井戸は第３面の奈良時代に掘られた大きな溝があった場所につくられ、また石の一部には第２面で発見された墓の上に立っていたとおもわれる五輪塔（ごりんとう）の一部が使われていました。

次にⅡ期の遺構ですが、これを全体的に見ると、北側の遺構は９号溝によって、南側は３号溝や５号溝によって囲まれている様子がうかがえます。このうち北側の遺構は９号溝と同時期の８号溝によってさらに中で区画されてましたが、この８号溝の南側には多数の建物柱穴が発見されたのに対し、北側では建物柱穴はほとんどなく、木棺墓がつくられていることから、おそらくこの溝によって居住地と墓地の境界としていたものと思われます。この８号溝の南側には多数の建物柱穴に混じって平面の形が長方形をした土坑が等間隔に並んでいますが、これらは建物に関係する何らかの施設であったと考えられます。また南側の遺構のうち建物群は3号溝によってさらに小さく区画されていました。この３号溝の西側には鍛冶炉（かじろ）跡をはじめ、その傍（かたわら）には鉄を叩く時に台座（だいざ）として据えられていたと考えられる鉄床石（かなとこいし）の抜跡が、さらにその南側には、鉄滓（てっさい）など鍛冶作業で生じる堆積物などを捨てた廃滓場（はいさいじょう）があり、一連の鍛冶施設が設けられていました。

このように第１面ではＢ区に続く近世の集落跡が発見されましたが、この時代になると、建物を溝で区画する範囲や鍛冶施設も小規模なものに変わっていく様子を見ることができました。




第５図　Ｃ区Ⅰ面遺構配置図( 1/400 )

C区第１面調査区全景

調査区南側掘立柱建物群

鍛冶遺構群

石組井戸跡

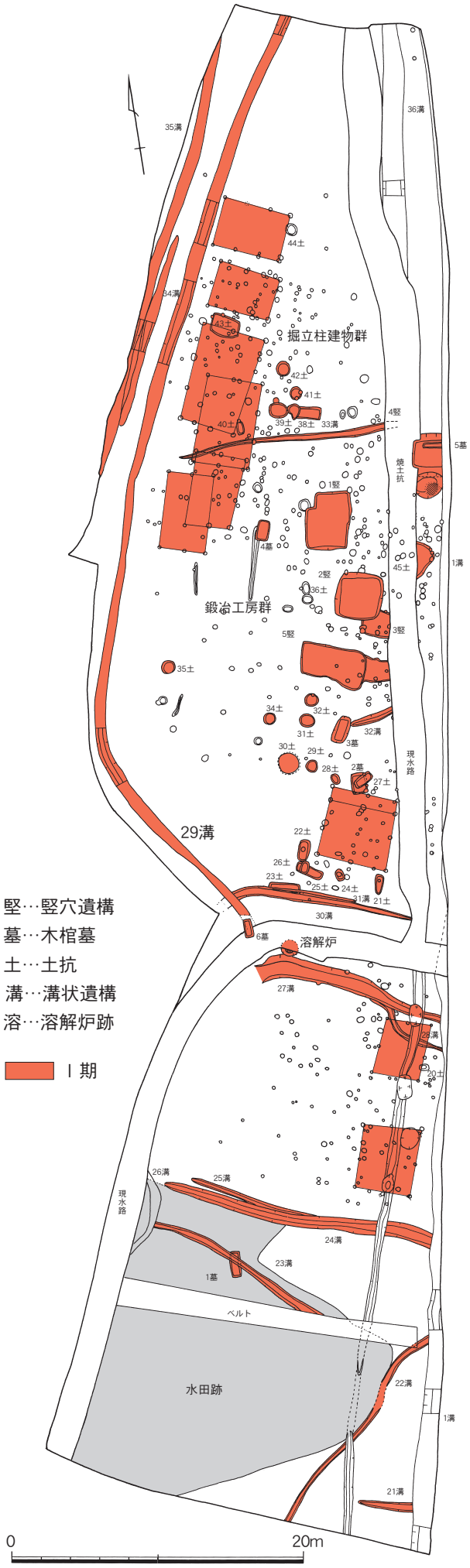
鍛 冶 炉 跡

### 2）第２面の調査

第２面では、平安時代後期から鎌倉時代前期〈今から約700～800年前〉の遺構がまとまって発見されました。

これらの遺構を全体的に見ると、調査区北側の29号溝に平行して掘立柱建物群が並び、その東側には方形ないしは長方形の形をした竪穴遺構が隣接してつくられていました。この竪穴遺構の深さは10cm～50cm程度で床面は平坦に整えていました。この遺構の中からはわずかながらも鉄滓（てっさい）や鍛造剥片（たんぞうはくへん）などの鍛冶（かじ）関連の遺物が出土していることから、遺構の性格としてはB区の土坑と同様の鍛冶工房跡と考えられます。また、この竪穴遺構よりも少し離れた場所では、鉄を溶かして鋳型（いがた）に流し込むための施設である溶解炉（ようかいろ）跡が発見されました。したがって、この集落では鍛造（たんぞう）製品だけでなく鍋や釜などの鋳造（ちゅうぞう）製品も製作されていたと考えられます。また、この調査区南側では、22・26号溝に沿ってその南側に、Ｂ区で発見された包含層（ほうがんそう）（水田跡）とよく似た堆積状況を示す層が検出されました。このことから水田が集落の南側に営まれていた様子がうかがえました。この他、調査区内からは点々と墓跡が発見されました。これらの墓の中を掘ると、１号木棺墓の中からは中国製白磁（はくじ）碗と刀子（とうす）、2号木棺墓からは中国製青磁合子（せいじごうす）や漆塗（うるし）りの容器に入った中国製の鏡、刀子（とうす）、土師器（はじき）の皿などが、３号木棺墓からは中国製青磁碗と小刀（しょうとう）が、4号木棺墓からは中国製青磁碗、青磁皿、小刀といった当時の貴重な品々が出土しました。

このように第２面では、Ｂ区で発見された集落よりもさらに古い時代の鍛冶工房群を備えた集落が発見されました。これらの遺構の中からは、墓の中から出土した副葬品のほか、石製の硯（すずり）や柱穴の中に埋められた宋銭（そうせん）などの貴重な遺物も出土しています。このことは当時の宋銭の流通が、この地域まで広がっていたことを示すもので、鉄製品の代償として手に入れられたものであることを物語っていると言えます。第２面の調査では、当時の集落が水田経営はもちろん、こうした鉄製品の製作とそれに伴う流通により、富を手に入れて繁栄していた集落の様子を知ることができました。




第６図　Ｃ区Ⅱ面遺構配置図（1/400）

C区第２面全景

２号竪穴遺構

27号溝に壊された溶解炉

第２面出土の硯

建物柱穴跡内宋銭出土の様子

3 号木棺墓標石出土の様子

3 号木棺墓内人骨出土の様子

2 号木棺墓内遺物出土の様子

4 号木棺墓内遺物出土の様子

### 3）第３面の調査

第３面では、弥生時代中期（Ⅰ期）から後期（Ⅱ期）〈今から約2,100～1,700年前〉の遺構と、古墳時代前期〈今から約1,600～1,500年前〉の遺構（Ⅲ期）及び奈良時代〈今から約1,300～1,200年前〉の遺構（Ⅳ期）が発見されました。

このうちⅠ～Ⅱ期の遺構としては、二つの大きな甕（かめ）の縁を合わせて中に死者を納めて埋葬した甕棺（かめかん）墓や扁平な石を両側に立てて間に板材を組み合わせて中に死者を埋葬した木棺（もっかん）墓、扁平な石材を組み合わせ中に死者を埋葬した石棺（せっかん）墓、素掘りの墓穴に死者を納め上に扁平な石を重ねて蓋をした石蓋土壙（いしぶたどこう）墓など、当時の様々な形態で営まれた墓地が発見されました。これらの墓の上には、墓の位置がわかるように標石（ひょうせき）が置かれていました。この他、扁平な石を四周に立て並べ、床にも敷いていた何らかの儀式の場としての用途として使われたと見られる配石（はいせき）遺構や表面に赤く丹を塗った特殊な土器を使ってやはり何かの儀式を行った後、穴の中にそれを捨てた祭祀（さいし）遺構なども発見されました。これらは切合関係から木棺墓・甕棺墓・祭祀遺構が古く弥生時代中期（Ⅰ期）、石棺墓・石蓋土坑墓・配石遺構は弥生時代後期（Ⅱ期）の遺構です。また、Ⅲ期の遺構は２号大溝、Ⅳ期の遺構は１号竪穴住居跡と１号大溝です。

このように第３面では４期にわたる遺構が発見されましたが、中でもⅠ～Ⅱ期は弥生時代の墓がまとまってつくられ、しかも並んで埋葬するという当時の墓地の風習を見ることができました。

第７図　Ｃ区遺構配置図（1/200）

弥生時代墳墓群標石出土の様子

墳墓群全景

6 号甕棺墓

20号木棺墓

10号石棺墓

配 石 遺 構

祭祀遺構遺物出土状況

奈良時代の竪穴住居跡

## Ⅲ．まとめ

今から2000年程前の弥生時代に、この地域にはじめて集落がつくられました。Ｃ区第３面で発見された墓地は、稲作の伝播とともにこの地域での定住生活が行われるようになった証しとなるものです。この墓地は200年以上も同じ場所に継続して営まれていましたが、その長い時間を経過する中で墓の数はわずかに43基と少なく、一時期の集落の規模からするととても小さな集落であったとおもわれます。しかし、墓の形を見ると、時の流れとともに木棺墓・甕棺墓から石棺墓・土坑墓へと形を変えていった様子がうかがわれます。ここに北部九州の文化を敏感に感じながら生活を行っていた当時の人々の生活の息吹を感じ取ることができます。

その後、この地での生活の痕跡は今日まで絶えることなく続いてきました。その中で最も発展を遂げたのは中世の平安時代後期から室町時代にかけての頃で、現在この一帯に広がる水田の景観もこの頃に作られたものです。また、この時代の集落の人々は、大がかりな鍛冶工房群を備え、大肥川から豊富に採れる砂鉄を原料に刀や刀子などの武器に鋳物類・斧などの農工具類も製作していました。こうして製作された製品を各地に流通させることによって、当時日宋貿易などにより日本に輸入された中国製の陶磁器や鏡などを手に入れることができたのです。

今日まで大明地区は、古代につくられた条里の跡が残っているというだけで、ほとんどこの地域の歴史の手がかりとなるものはわかっていませんでした。今回の大明地区担い手育成基盤整備事業を契機として、大肥中村遺跡の発掘調査が開始された平成10年度以降、数年にわたる調査の中で大明地区のいたる場所で異なる時代の各種の遺構が発見され続けてきました。この結果、大明地区の歴史はこれまでの認識とは全く異なるものであることかわかりました。

今回の基盤整備事業により私たちが見慣れた大明地区の水田景観は、これまでと全く異なるものに変わろうとしています。しかし、それ以前にあった水田も先人の苦労と努力により、時代とともに何度も作りかえ、拡張を行いながら、古代の条里と見間違うように四角く広い碁盤の目のような立派な区画に仕上げられたものであったということを私たちは発掘調査で教えられました。現在進められている基盤整備は、生活が少しでも豊かに便利になるようにと水田の拡張を進めてきた先人の願いが受け継がれたものであるように思えます。

## Ⅳ．おわりに

この地区は長い歴史に見るように、もともと農業の盛んな地域でした。しかし、近年は農産物の自由化と上がらない農業所得の中で、都会への若い人々の流出とそれに伴う農業の担い手不足、さらには農業者の兼業化・高齢化が目立つようになりました。そうした中で、今回の基盤整備事業を契機として、森山有男氏を中心に各集落の有志が集まり、日田市内では初めての営農組織である「大肥郷ふるさと農業振興会」が結成され、この地域の農業生産を一手に引き受けるとともに、農業専業機械オペレーターの育成、住民参加型の体験農業の開催、地元でとれた農産物を生かした手づくりみそ・豆腐づくりの体験できる加工施設「ももは工房」の創設など積極的な農業生産活動を展開し、大分県内でも一躍注目を浴びる地域となりました。中世に大肥中村遺跡でみせていた活気と繁栄が、再び今、地域の集落の方々の努力と結集によって、本来の姿である農業生産を通して甦ろうとしています。本書がその力の一部となることを願う次第です。

大肥郷ふるさと農業振興会の活動風景

## 歴　史　年　表

| 時　代 | 年　　代 | 日本の主な出来事 | 大肥中村遺跡 |
|---|---|---|---|
| 縄　文　時　代 | 約10,000年前～2,300年頃前 | 土器づくりがはじまる。狩猟・採集が生活の中心 | |
| 弥生時代前期 | 2,300年頃前～2,100年頃前 | 大陸より稲作が伝播する。各地に国がつくられる | |
| 弥生時代中期 | 2,100年頃前～1,900年頃前 | 奴国などの北部九州の国が中国に使いを出す | Ｃ区第３面Ⅰ期 |
| 弥生時代後期 | 1,900年頃前～1,700年頃前 | 中国の書物に「倭国大乱」の記事がみえる | Ａ区Ⅰ期・Ｃ区第３面Ⅱ期 |
| 古墳時代前期 | 1,700年頃前～1,600年頃前 | 全国で大規模な古墳がつくられるようになる | Ｃ区第３面に期 |
| 古墳時代中期 | 1,600年頃前～1,500年頃前 | 大陸から登り釜・製鉄などの技術が伝えられる | Ａ区に期 |
| 古墳時代後期 | 1,500年頃前～1,350年頃前 | 群集墳や横穴墓などの墓が多数見られる | Ａ区Ⅲ期 |
| 奈　良　時　代 | 1,350年頃前～1,200年頃前 | 平城京遷都。各地に条里制が施行される | Ａ区Ⅳ期・Ｃ区第３面Ⅲ期 |
| 平　安　時　代 | 1,200年頃前～ 800年頃前 | 平安京遷都。各地に荘園がつくられる | Ａ区Ⅴ期・Ｃ区第２面 |
| 鎌　倉　時　代 | 800年頃前～ 650年頃前 | 鎌倉幕府による政治。日宋貿易が盛ん | Ｃ区第２面・Ｂ区Ⅰ期 |
| 室　町　時　代 | 650年頃前～ 450年頃前 | 足利幕府による政治。日田大蔵氏の滅亡 | Ｂ区Ⅱ期・Ｃ区第Ⅰ面１期 |
| 江　戸　時　代 | 450年頃前～ 150年頃前 | 徳川幕府による政治・日田が幕府直轄地となる | Ｃ区第１面Ⅱ期 |


大　肥　中　村　遺　跡

－発掘調査概報－

平成15年３月20日

発　行　　日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1

印　刷　　尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8